土木学会創立100周年記念事業の意義と今後の展開

JSCE's Centenary Celebration : Accomplishments and challenges

［対談者］
磯部 雅彦　高知工科大学 学長、土木学会 第102代会長
藤野 陽三　横浜国立大学 上席特別教授、土木学会創立100周年事業実行委員会 委員長

［オブザーバー］
熊本 義寛　東日本旅客鉄道(株) 執行役員 総合企画本部 復興企画部長
土木学会創立100周年事業実行委員会 委員兼幹事長
日比野 直彦　政策研究大学院大学 大学院政策研究科 准教授
土木学会創立100周年事業実行委員会 委員兼副幹事長
山﨑 聡　東日本旅客鉄道(株) 東京工事事務所 開発調査室副課長
土木学会創立100周年事業実行委員会 企画担当幹事

2014年12月2日（火）9：00～11：00　土木会館 役員会議室 にて

土木学会創立100周年記念式典、記念祝賀会が、延べ約2600人の出席の中、2014年11月21日に無事に執り行われた。土木学会会長と土木学会創立100周年事業実行委員会委員長に、100周年ウィークを終えられた今のお気持ち、これまでに考えたこと、今後の活動などについてお話をうかがった。

磯部――おかげさまをもちまして記念式典を東京・有楽町の東京国際フォーラムでたいへん盛大に開催することができました。皇太子殿下をはじめ、国土交通省、文部科学省、海外21の学会・協会からも代表の方々にご参加いただきました。1400の席はほぼ満員。途中で募集を締め

切るほど盛況でした。殿下を会場でご誘導している間、「多くの人が集まりましたね」と、お言葉をいただいたほどです。ご祝辞では利根川の東遷という具体的な事業に触れ、社会に貢献する土木へのお褒めの言葉をいただき、感激しました。

第二部ではまず、私が土木学会創立100周年宣言（以下、100周年宣言）を25分かけて読み上げました。とても長い宣言ですが、中身は濃いと思います。そこでは、あらゆる境界をひらき、持続可能な社会の礎を築く、という点をテーマにすえています。

初代会長である古市公威（ふるいちこうい）先生がおっしゃったように、土木工学は総合工学です。「境界をひらき」には、既存の専門領域にとらわれずに広くほかの領域を取り込みながらその発展に努めるべきという、古市先生の言葉の主旨を受け継いでいます。一方、これからの100年を見通したとき、過去に築き上げてきたインフラを維持しながら、生活水準をより良くしていくことをずっと続けていかなくてはなりません。その意味を込めて、「持続可能な社会の礎を築く」と表現しました。言うのは簡単です。しかし、実現は難しい。今後100年を掛けて実現を目指すのにふさわしい目標であると思います。

皇太子殿下からも力強い励まし

磯部――第二部では続いて、山崎正和さんの特別講演「日本人の新しい人生設計」をお聞きしました。再三にわたって100周年宣言に触れていただきました。100周年宣言は講演主旨とも相当一致があったという意味で、お褒めの言葉を頂戴したように思います。

第三部は、市民普請大賞と未来のT（テクノロジー）&I（アイデア）コンテストという二つのコンテストの表彰式に充てました。このうち未来のT&Iコンテストは将来のインフラに関してアイデアを募ったものです。アイデア部門で選ばれた5作品は土木技術者の協力で技術的な検討が加えられ、その中から最終選考で最優秀賞1作品が選ばれました。

藤野――私も、記念式典には感動しました。土木学会の会員であることを誇りに思うという方がたくさんいらして、非常にうれしかったですね。中でも、殿下から「持続可能な社会の実現に向けて、土木工学に携わる関係者の皆さんの積極的な取組みに期待します」とお言葉をいただいたのは、力強い励ましになって良かったと思います。皇室から御臨席を賜ることができたのは、国土交通省をはじめ関係各位のご尽力のおかげです。

記念式典の後に帝国ホテルで開催した記念祝賀会は、祝辞、鏡開きに続き、数えで100歳を迎える元会長の仁杉巌さんが乾杯の音頭を取って幕を開けました。飛び入りで国土交通大臣の太田昭宏さんが加わり、祝辞をいただきました。会場は一段と盛り上がりましたね。祝賀会では会う人ごとに、「大成功ですね。おめでとうございます」と言われ、成功を実感することができました。

磯部――先ほど申し上げたように、土木工学が総合工学であるからには、専門以外の領域まで取り込んで総合的に発展させていかなければなりません。それを実践し社会をより良くしてきたのが、これまでの100年だったと思います。

土木学会の創立からさかのぼって、明治維新から現在までをたどってみます。維新当時はまだ何もない時代です。近代土木を早くに立ち上げようという時代でした。お雇い外国人技術者の貢献と同時に、留学から帰国した日本人技術者の活躍も目覚ましかった。その後も、関東大震災や第二次世界大戦からの復興など、国の立て直しに大きく貢献してきたのが、土木の歴史ではなかったかと思います。こうした貢献を、向こう100年にわたってまた続けていきたい、と土木学会創立100周年を機に決意を新たにしました。

未来のT&Iコンテストで市民とも交流

藤野――土木学会創立100周年記念事業（以下、記念事業）に向けたタスクフォースを結成したのが、2007年です。幹事長は当時、東京工業大学（現在は京都大学）におられた藤井聡さんにお願いしました。藤井さんに古市先生の初代会長就任演説を解説してもらう勉強会から始めました。当時、公共事業には世間の厳しい目が注がれていましたから、その重要性を社会にどう訴える

かという点が当初は議論の中心でした。その後、各支部との連携を深め、2012年には実行委員会を設置し実務的な活動に取り組み、記念式典や記念事業などに臨みました。多くの方々の協力を得て、人の力を感じた7年間でした。

磯部――記念事業の内容もご紹介ください。

藤野――社会安全、社会貢献、市民交流、国際貢献、と四つの部会を立ち上げ、それぞれがさまざまな事業を実施しました。これら四つのテーマは、土木学会が公益社団法人に移行するのに併せて掲げた使命をベースにしています。創立100周年に向けて考え出したわけではなく、土木学会の歴史の中で脈々と受け継がれてきたものです。

記念事業としてはこのほか、出版事業にも取り組んでいます。記念出版物17点のうち15点がすでに発行済みです。

磯部――とりわけ、編集特別委員会で担当した100年史の『土木学会の100年』は記念になりますね。過去の委員会活動は、すべてわかる。とてもいい記録です。大学で土木史の教科書にも使えると思います。

藤野――未来のT&Iコンテストという形で市民との交流を深める機会をもてたのは、画期的でした。記念式典では小学生から65歳以上までの受賞者が表彰台に上がりました。感銘を受けました。日本建設業連合会の協力があったからこそできたイベントです。

審査委員長を務めていただいた日本科学未来館館長で宇宙飛行士の毛利衛さんは「土木は科学である」と言われました。これは、土木のもう一つの側面です。毛利さんは、サイエンスとしての土木を見出してくださいました。このコンテストは今後もぜひ続けていってもらいたいと思います。

磯部――一連の国際シンポジウムも印象深いものです。一つは、土木学会の講堂で開催した防災に関する国際円卓会議です。2012年は名古屋、13年はジャカルタで開催し、今回は3回目です。日本を議長国に、アジア各国の土木技術者が議論を重ねてきました。今回はその一つのまとめとして、災害に関する具体の報告を踏まえ、災害防止・軽減に向けた実効性のある取組みと対応策を話し合いました。東日本大震災以降、タイの大洪水やフィリピンの高潮など、国際的に注目される災害が相次いだこともあって、参加者の関心は高かったですね。

米国の学会は予算配分を訴えた

磯部――もう一つは、東京駅に近いJPタワーで開催した国際フォーラムです。海外の主要な学会・協会の代表者や国土交通省技監の徳山日出男さん、それに私の講演を通じて、過去100年の間に土木が果たしてきた役割を振り返るとともに、将来の国際協力のあり方などを話し合いました。申し合わせたわけではありませんが、持続可能な社会の礎を築くことを目指す「社会と土木の100年ビジョン」（将来ビジョン）を土木学会会長として私が紹介した後、徳山さんから、持続可能な社会の中で重要なポイントになる災害対策に関して、道路網の整備という観点から具体的に話していただけました。続いて米国の土木学会の会長からは、そのためには予算配分が必要という訴えが提起されました。日本の学会はお金の話はあまりしませんが、米国の学会はまず、それを訴えた。印象的でしたね。この3人の講演はうまくつながることができて良かったと思います。

全体を通じて、国際会議の場でも日本の存在感は非常に高まったという印象です。一昔前は、日本人は自分の出番の時だけ前に進み出て、それ以外は隅っこで座っているだけ、という印象です。しかし今回は、ホスト国ということもあって、堂々と真ん中に座って、国際会議を進行することができました。

藤野――その後はテクニカルツアーとして、東日本大震災の復興の現場に内外の参加者が足を運びました。中国の参加者からは「復興の現場に実際に来てみると、聞いている話と違う。来てみて良かった」との声が聞かれました。中国では、震災復興は非常に遅れている、国は何もやっていない、と盛んに報道されているそうです。現場に実際に足を運んでいただくことの大事さを痛感しました。

磯部――各支部の取組みもほとんど見て回りました。土木コレクションの会場には目抜き通りに面した立地

の最も良い場所を借りていました。少しでも多くの市民に見て欲しいとの思いが一致したのでしょう。どこを訪ねても、市民の方々が足を止めて支部の取組みをご覧になっていたことには驚かされました。支部のやることはすごいと思います。

全国の各支部と連携を図るのは、たいへんだったのではないですか。

藤野――初めてのことで、確かに困難にも直面しました。何かを伝えたとき、本部からのお達しと受け止められないようにすることには心を配りました。支部の事情に配慮する必要に気付いて、次第にうまく交流できるようになったと思います。支部との交流はこれからますます大事になるでしょうから、本部はこの点、大いに努力の必要があります。

磯部――うまく連携を図るための秘訣を、いまどう振り返りますか。

藤野――やっぱり、各支部に任せることです。本部があまり口出ししない。それが人を育てるうえでも大事とも思っています。

磯部――土木学会は言うまでもなく、ボランティア団体です。職員を除き、給与は出ません。業務命令で強制もできない。会員一人ひとりのやる気が、何より重要です。そのやる気を束ねて、大きなプロジェクトをつくり上げていく、それが実行委員長の役割とも言えます。藤野さんはその役割を、しっかり果たされましたね。

藤野――やったことは名誉になり、感謝されます。それで、創立100周年記念式典のプログラムには、事業に携わった関係者1000人を超える方々のお名前を掲載しました。きっと喜んでもらえると考えてやったことです。

磯部――義務や脅しでやっているわけではありません。それだけに、関係者全員が100%同じ方向を向くことは望めません。ただ、反対方向さえ向かなければ、それでいい。ベクトルがおおむねそろっていれば、かなりのところにまで到達できますから。

磯部 雅彦 ISOBE Masahiko

ありのままに伝えたい土木の姿

藤野――記念切手の発行ではうれしいことがありました。学会の若手を中心にタスクフォースをつくって、デザインに参画できたことです。非常にいいものができたと思います。売れ行きもいいと聞いています。女性に人気が高いようです。

磯部――この記念切手には土木施設が30種類以上描かれているそうです。切手を買って、その30をぜひ探し出して欲しいですね。

藤野――これら記念事業の内容を伝えるにあたっては、広報に努めました。折に触れて記者会見を開き、事業の内容を伝えてきました。京都大学の藤井さんは、インターネット番組サイト「土木チャンネル」上で関係者や文化人と対談し、広報してくれていました。非常に多くの方々にご覧

藤野陽三 FUJINO Yozo

いただいたようです。その成果も大きいと思います。うれしかったのは、朝日新聞が11月24日付の新聞で、土木学会100年の歩みを正面から取り上げ、半ページの記事を組んでくれたことです。

磯部――広報はいつも弱いと言われてきました。「自分が、自分が」と言わないのは、良い点でもあり、悪い点でもあります。太田大臣も祝辞で、こういうことを言われていました。「橋をつくっても、誰の作品ということでなく、世のため人のために黙々とつくり、喜んでもらう。私がやったとは言わず、誇りを持ちつつも静かに見守るのが、『シビルエンジニアだ』」――と。大臣自身、その言葉にふるえる思いがしたそうです。

しかし、いまは有言実行の時代です。誇張して言うことは慎むべきですが、やっていることをありのままに話すことは、ぜひ必要です。土木学会としては土木広報戦略委員会を立ち上げ、産官学が連携して広報に取り組んでいます。土木の姿を正しく市民の方々に理解していただく活動を大々的にやっていきたいと思います。

将来ビジョンには北極星の役割

藤野――ところで、磯部さんは将来ビジョンのとりまとめに策定委員長として携わってきました。何を一番に考えましたか。

磯部――一番に考えたのは、どのようなビジョンを策定するかという点です。もちろんそれが一番大事ですが、同時に、土木学会には4万人規模の非常に多くの会員がいるわけですから、限られた人数で構成された策定委員会での検討成果をどのように会員全員のものにしていくことができるか、という点にも心を砕きました。

これまで100年にわたって土木が社会に貢献してきたことは、社会全体として十二分に認められていると思います。ところがいま、インフラの飽和が言われ、土木技術者が本当に意味のある仕事をしているのかとも言われています。そのため、土木の分野に若い人があまり入って来なくなっています。しかし真実は、土木の分野でやるべきことはたくさんあります。したがって、若い人にたくさん入って来てもらって土木の分野を活気のあるものにしていかないといけません。

どのような目標を掲げれば土木を魅力あるものにできるかを考える中で打ち出したキーワードが、持続可能性です。礎をつくっていくのが土木の役割ですから、エネルギー、少子高齢化、災害……と持続可能性を脅かすさまざまな問題がある中で、持続可能な社会の礎づくりを土木がやっていかなければ、と考えました。

政治や技術など社会の環境が変化していく中で、何か一つ不動の目標

を定めたかった。言うなれば、北極星です。暗い夜道を旅していても、北極星さえ見えれば、進むべき方向がわかります。しかも、みんなが北極星を目指し、その方向に向かう。人によっては、30度くらいずれていても、180度ずれているわけではない。大きな方向性がそろっていれば、合わせた力は大きなものになると思ったので、不動の目標を定めることをまず大きなテーマにすえたのです。

藤野――100年先に向けた将来ビジョンです。原点には、何があったのですか。

磯部――土木技術者や土木学会の会員が自信を持つこと、それに尽きます。いま土木への風当たりが相当に強い。それだけに、自信が揺らぎかねません。そこに、一つの方向性を示したかった。

藤野――いいタイミングで出せたと思います。若い人を巻き込んで策定できたのが良かった。策定委員会メンバーの活動地域も分散しています。磯部さんらしいバランス感覚です。

磯部――幹事団のおかげですよ、これができたのは。

自信を胸に後ろ姿で魅力を語れ

藤野――今後、このビジョンを会員一人ひとりの活動にどう生かしていくかが問われていくと思います。土木学会は志を同じくする人の集まりです。全国に散らばっているのですから、地域ごとに、土木技術の研鑽を図る自発的なグループ活動が生まれるといいですね。

磯部――記念事業でこれだけ盛り上がったのですから、副次効果も出ていると思います。2014年2月には、法人会員を含め会員数が4万人を超えました。土木ボランタリー寄附（dVd）は2014年12月現在で約6400万円集まっています。

藤野――東日本大震災をきっかけに社会インフラの問題が顕在化し、ここ数年は土木への期待が高まってきた時代です。追い風の中、創立100周年を迎えることができたと思うと、時機的にも良かった。それもあって、やればできるという自信を会員が取り戻す機会をもらった、そういう副次効果もあったように思います。

また実行委員会は、人材育成の場としても機能しました。女性会員が活躍し、事務局の職員も、何をやるべきかを自律的に考えるようになってきました。人材育成という点も、大きな副次効果ではなかったかと思います。

磯部――残された課題は、「継続」ですね。今回の記念事業を通して、土木の魅力を示し、成果を上げてきました。しかし、単発の打ち上げ花火に終わってしまってはもったいない。今回の経験を生かし、より大きな成果を上げられるように、継続を図りたいと考えています。

ただ、それには新しい組織が必要です。継続に向けて定常的な部門を置き、その部門の下に委員会を設置し活動を割り振っていこう、と検討を進めている段階です。限りはありますが、必要な予算もできる範囲で配分していきたい。記念事業を実行してきた勢いに乗って、2015年度をめどに継続のための組織体制を整えたいと思います。

藤野――難しい面もあると思います。これまでは創立100周年という目標がありましたが、それがなくなるわけですから。インセンティブというか、動機付けになる仕掛けを活動にどう組み込んでいけるかという点が、成功のカギを握っていると思います。

今回、記念事業を通じて、種をまいたという気持ちです。今後は、芽が出て、育ち、大きくなって欲しい。それには、水と太陽と肥料が欠かせません。言い換えれば、会員と支部と本部の力が不可欠です。どれが欠けても、育ちません。学会全体が協力体制の下で、土木の分野がさらに成長していくことを期待しています。

磯部――土木学会の会員全員が、土木の仕事は一生を捧げるにふさわしい職業であるという点に自信を持って、これからも携わっていって欲しい。そしてその後ろ姿で、土木が魅力ある分野であることを若い人に語って欲しい、そう願っています。